

お父さん、私にチャンスを与えてくれてありがとう！

清泉小学校 五年

安部 京

私は、父に感謝したいと思う。それは二〇〇三年から

二〇〇六年、私が年長から小二までのお話である。

ある日突然、父が私に真剣な顔で言った。「仕事の関係で中国の上海市に転動する事になった。」

私はその時、びつくりしたが、やがてきっぱりと、

「そんなの絶対にいやだ。お友達と先生とお別れするの、絶対にいやだもん！」と泣きそうな顔で言って、部屋に戻ったが、新しい事にチャレンジしてみてもいいかなあと思った。今頃文句を言つても間に合わないと思つた。

次の日には父に、

「私も行きます。」

と言つた。

そして二〇〇三年―。ついに中国の上海に来たのだ。

そして三週間位たったら、中国人の幼稚園に入園した。

中国語は一言もわからずに……。もちろん日本人一人だった。最初の日、心ぞうがばく発する位ドキドキした。

私は始め、クラスのみんなに色々質問されて、わからなくて泣いていた。けれども三ヶ月弱、ついに私はかんたんな標準的な中国語が話せる様になった。うれしくてたまらなかつた。まるで人生で最高の日の様に。どうやってお友達が出来たか？それは私が、積極的にとんとんと話して

いったからだ。

どうして父と母は私を中国人の幼稚園に行かせたのかというと、私は小さい頃から社交的な性格で、中国で生活する機会を利用して、世界で英語の次に多く話されている中国語を学ばせようと思つたからだ。

私は幼稚園のみんなの発音を聞いていたので、いつの間にか中国語の正しい発音で話せる様になっていた。

いつも中国人のいるお店に行つて、私が中国語で話をしたら、店員さんが、

「親のどちらか中国人ですか。」

と聞いてくる。どうしてかというと、私の発音はネイティブの中国語であるからだ。まるで中国人になれた気分だ。

今、私はここ、日本にいても私が中国語が話せるという貴重な財産を守り続けるために今でも父は、中国語の学校に通わせてくれている。毎年夏には、上海に留学もしている。私は二〇十五年のボイスカウト世界ジャンボリーで、中国語の通訳が出来るようになりたい。

私は、やればできる！とあらためて思う。こんな機会を作ってくれた父に、感謝している。将来中国と日本のかけ橋になりたい。

「お父さん、ありがとう！」